

今週のメニュー

■トピックス

- ◇第1回 九州「住まいの建材・設備フェア」開催
—樹脂窓の良さを紹介—

■随想

- ◇古代ヤマトの遠景〔番外〕(17)

木下 清隆

■編集後記

■トピックス

◇第1回 九州「住まいの建材・設備フェア」開催
—樹脂窓の良さを紹介—

6月2日～6月3日の2日間、[第1回 九州住まいの建材・設備フェア](#)（一般社団法人日本能率協会主催）がマリンメッセ福岡で開催されVECも出展いたしました。来場者数は3,231人となりました。



少子高齢化が進行するなか、住宅ストック数が世帯数を上回り、空き家も年々増加するなどの課題が浮かんできており、国でも中古住宅流通やリフォームの活性化を促す施策が挙げられています。また、国主導による「地方創生」の立場から、地方における住宅や暮らし方の提案も推進されており、地方への移住やそれに伴う住まいのリフォームへの関心はますます高まると考えられます。

「福岡県」は19年連続で人口が増加しており、また、住みたい都道府県 No.1に輝き、注目を集めています。全体的な人口減少が進むなか、政令指定都市のなかでも「福岡市」は人口増加率が平均の5倍と伸びを見せており、また、高齢化が進んでいる中、若者（15～29歳）の比率が高いのも特徴です。

これらを背景に、今注目の市場である「福岡」にて、九州地区でははじめて、住まい・暮らしの提案を行う工務店、住宅メーカー、リフォーム会社のプロを対象にした専門展示会である、「住まいの建材・設備フェア」が開催されました。



VEC ブース

今回、(株)日本住宅新聞社と樹脂サッシメーカーに協力頂き、弊協会でもブース展示を行いました。「冷却体感BOX」という単板ガラスアルミ窓、複層ガラスアルミ窓、そしてLow-Eガラス樹脂窓の種類により、断熱性能の違いが実感できる装置を設置、来場者に窓の違いを実際に触れ、体感して頂きました。また、世界レベルの断熱性能を有する樹脂製外窓と、改修により結露・遮音も実現する樹脂製内窓のカットサンプルを展示、紹介しました。来場の皆さまは、窓ガラス、

及び窓枠の違いによりこれほど断熱性能が違うのに驚かれ、樹脂窓を設置することにより省エネ出来ることに加えて、ヒートショックの予防やコールドドラフト現象を抑制し、快適で健康な暮らしを実現する商品であることもご理解頂いただけたものと思います。

樹脂窓は、全国平均で 15.2%（日本サッシ協会調査）と伸長してきていますが、西日本、特に九州地区では 9.7%と関東の 7.7%ともまだ低く、今後もこうした機会をとらえて、樹脂窓を広く全国に紹介してまいります。

■ 随想

◇古代ヤマトの遠景〔番外〕（17）

木下 清隆

<前回とのつながり>

櫛玉命の素性を明らかにするために、伊勢と関わりの深い天日別命を『伊勢国風土記』の中に探したところ、伊勢津彦命が現れてきた。風土記の内容は、天日別命が伊勢津彦命を伊勢から追い出したという話である。今回はその風土記の話の謎解きである。

記紀の神武東征に全くその名が出てこない天日別命の、この伊勢国平定譚は、一体何を語り掛けようとしているのだろうか。神武天皇が大和に乗り込むついでに伊勢の国を征服したというのは、取って付けたような話であるし、そこに居た国神があっさり国譲りして、戦いもせずに国を出たと言うのも不思議な話である。このような内容から、これは全くの創作譚であると片付けることはできる。しかし、風土記に収録されている以上、何かの史実を反映した伝承であると考えられることもできるわけで、ここでは後者の立場から何かを見出す検討をしてみることにする。

そこで改めて風土記の内容を整理し、項目毎にその内容を検討してみることにする。

1) 伊勢の国は、天御中主尊の十二世の孫、天日別命が平治した処である。

— この中の天御中主尊は『古事記』の冒頭に高御産巢日神と神産巢日神と共に出てくる神で、それぞれが独神でその姿は見せなかったことになっている。明らかに創作神と考えられる天御中主尊のような神から後裔が出ることは一般には考えられず、多くの氏族の系譜をまとめた『新撰姓氏録』でも服部連と御手代首というマイナーな二氏しかこの神を祖とはしていない。このように、この神が天日別命の祖神となっていることは、この系譜が創作である可能性を示していることになる。更にこの天御中主尊は『日本書紀』には登場しない神であり、『古事記』の世界で創作された神と見られることから、伊勢において、このような伊勢国誕生譚が創作されたのは古事記以降となる。

2) 天日別命は、神武東征軍に参加して大和に入り、天皇から『天津の方に国あり。其の国を平けよ』と命じられた。



神武天皇を祀る橿原神宮（奈良）
（右手は畝傍山）



畝傍山遠景

— 天日別命が神武天皇に従って大和に入った話は記紀には出てこない。また、神武東征譚をベースとしたこの個所の記述は史実を反映しているのか、との問題が出てくるが、史実とは考えられない。なぜなら、当時の神武軍は、後で詳しく論じるが、伊勢攻めを行なえるほどの大部隊ではなかったと考えられるからである。史実としてこのような伊勢攻めが行なわれたとするなら、これは神武東征時代からかなり後の時代でなければならないことになる。従って、天日別命による伊勢攻めは神武東征譚の一部をなす話とは考えられない。

3) 伊勢の国の先住者として伊勢津彦がいたが、天日別命の強い要請により、伊勢津彦はこの国を明渡し東国に去った。

— 神武東征で大和入りした神武軍は大和近縁の土賊を次々に退治する話が出てくるが、この場合相手に対する配慮は文章上何も無く、些か冷酷な文となっている。このような大和での記述に対し、風土記での伊勢津彦に対する記述は、甚だ気配りの行き届いた文章となっている。伊勢津彦を追い出すことに対するためらいがあるのである。この違いは何処から来ているのだろうか。

恐らく、大和での話はほとんどが創作物語で、相手をどんなに悪しざまに書こうと問題が無かったのに対し、伊勢の場合は、現実に伊勢津彦が存在していたのではなかろうか。だから、風土記のような文章が生まれたのではなかろうか。更に、伊勢津彦を実在の人物とした場合、この人物は実際に伊勢の地を去ったのだろうか。それは彼が伊勢を立ち去るときの状況が、いかにも超越的な神のような存在として描かれているからである。要するに、伊勢津彦の描かれ方が前半と後半とでは矛盾しているのである。ここの部分を分かり易い文にして示すと、次のようになる。

「天日別命は、伊勢津彦に『汝の国を天孫に献上しないか？』と問うたところ、伊勢津彦は、『私はこの国を求めてやって来たもので、ここに住むようになって久しくなります。命令とはいえ簡単には聞き従うことは出来ません』と答えた。そこで、天日別命は兵を發して伊勢津彦を殺そうとした。これを見た伊勢津彦は、畏れ伏して『私の国は悉く天孫に献上します。そして私はここから立ち去ります』と謂った。天日別命は『汝が立ち去るときは、何を以って^{しるし}駿とするのか』と問うた。『私は今夜、八風を起して海水を吹き、波浪に乗って東に去ります。これが駿です』と答えた。真夜中になって、大風が四方から起こって大波が立ち、辺りは日が出たように光り耀き、陸も海も共に明るくなった。そこを伊勢津彦は波に乗って東に去った。」

この文のなかで、改めて伊勢津彦が実在した人物の可能性を示している個所を探すと、伊勢津彦が伊勢国へ自ら捜し求めてやってきて、そこに長い間居住していたとの記述が指摘される。伊勢津彦が本来、土地の神或いは何処かの神であればこのような記述のされ方はしない。神は本来招かれるものであって、自ら自分の好む場所を求めて移動することなど現実的には有り得ないからである。更に、別の風土記逸文に「此の神、昔、石もて城を造りて此に坐しき。」とあり、伊勢津彦が、石で城を築きそこに住んでいたことが述べられている。これも伊勢津彦実在説を裏付けるものと云えよう。神が自ら石で城を造りそこに住まうことなど考えられないからである。

このように考えると、天日別命は実在の伊勢津彦を追い出したことになるが、このとき伊勢津彦は存命中であったのかどうか問題となってくる。天日別命に対峙している伊勢津彦はそのとき生身の人間として、これに対していたのかという問題である。これについては、伊勢津彦は既に亡くなって長い年月が経っていたと考えられる。理

由は、天日別命が攻めて来たときに、伊勢津彦は単身で対応しており、当然彼を守っているはずの兵士の記載が全くないからである。更に伊勢津彦に対し、次のように原文では神の文字が使われていることである。

「兵を発して其の神を戮さむとしき。」

「国は宜しく^{くにづかみ}国神の名を取りて、伊勢と^{なづ}号けよ。」

といった例である。実在の人物を神として祀るようになるためには、これも後で詳述するが大変な時間の経過が必要である。

このように考えてくると、天日別命は、神となっていた若しくは土地の祖霊となっていた伊勢津彦を、伊勢から追放したことになる。また、伊勢津彦の伊勢退去の描写が甚だドラマチックで幻想的なのは、これでよく理解される。従って、天日別命は伊勢津彦を追い出しその座に自分が座ったことになるが、これは現実的な戦いによる権力の交替ではなく、単なる観念上の入れ替えに過ぎないことになる。そうであれば先に出した、伊勢津彦は実際に伊勢を退去したのかとの疑問に対しては、退去していないとの結論になってくる。これは観念上の退去であって、現実上の退去ではないからである。

このようなことから伊勢津彦は伊勢の大きな勢力の祖として祀られていたことになるが、その勢力とは何かが問われることになる。この問題に対する解答としては、その勢力は伊勢の国造以外には考えられないといえる。理由は、伊勢津彦が伊勢の実質的な支配者だったからである。だから、時の天皇は天日別命の復命を受けて悦び「国は宜しく^{くにづかみ}国神の名を取りて、伊勢と^{なづ}号けよ」と述べたのである。伊勢の実効支配者が伊勢津彦であり、その勢力が武力によって交代していないとなれば、その後裔は伊勢国造しかないことになる。



伊勢を流れる五十鈴川



伊勢神宮 内宮参道口
五十鈴川に架かる宇治橋

従って、この風土記逸文は、伊勢津彦を祖とする豪族、即ち伊勢国造が自分達の祖を天日別命に入れ替えた物語であることを示していることになる。もしこの推測が正しいとするなら、天日別命は新しく創作された神であることになり、このような入れ替えが起きた時期は、『伊勢国風土記』が編纂された頃である可能性が出て来る。理由は、天日別命が重要な史料に顔を出していないからである。記紀に登場していないことは既に述べたが、最も重要な『倭姫命世記』にもまともな形では、その名が出て来ていないからである。天日別命が度会氏の祖であるなら、その名が出てくるのが当然である。世記では日本書紀を真似たような、「一書曰」で始まる挿入文があるが、そこに「大若子命の先祖、天日別命」と出てくるだけである。これは明らかに後からの挿入文である。

このように世記の本文に出てこないということは、世記の原本と考えられる『太神宮本記』が作成されていた時点では、まだ、天日別命は誕生していなかったか、或いは誕生はしていたが度会氏側には、未だ知られていなかった等が考えられる。後で度会

氏側が天日別命のことを知り、改めて自分達の祖と見なして、世記に付加した可能性が高くなってくる。このような検討から天日別命は当初の想定とは異なり、新しく誕生した神である可能性が出てきた。

新しく誕生した天日別命が、伊勢津彦を伊勢から退去させる話は、出雲の国譲りの二番煎じといえるが、その真意がここに想定しているような、自分達の祖神を入れ替えることにあったとするなら、彼らは何故このような手の込んだことをする必要があったのかが大きな疑問として出てくる。

このことは持統朝の頃に、伊勢国造家も度会氏と同様に、一族の進退に係わる何か重大な問題を抱えていた可能性が出てきたことになる。

(つづく)

この「古代ヤマトの遠景」に対し、ご意見・ご感想を頂ければ幸いに存じます。>> [\(筆者\)](#)
「古代ヤマトの遠景」: [バックナンバー](#)

■ 編集後記

出張で新幹線に乗ることが多いのですが外を眺めていると色々気になることを見つけます。最近「大垣は奥の細道むすびの地」といくつも書いてあるのに気が付きました。

東北や北陸を歩き紀行していたのはイメージとしてあるのですが、なんで大垣を結びの地に選んだのか気になって調べました。

明確な理由は明らかになっていないようですが、交通の要衝の地だったから、知人や弟子がいたからなど様々な理由が考えられているようです。

いずれにしても『奥の細道むすびの地記念館』に行ってみようと思いました。

松尾芭蕉、奥の細道 大垣での結びの句。

蛤はまぐりのふたみにわかれ行く 秋ぞ

(リマル)

■ 関連リンク

- [メールマガジンバックナンバー](#)
- [メールマガジン登録](#)
- [メールマガジン解除](#)



◆編集責任者 事務局長 高橋 満

■東京都中央区新川 1-4-1

■TEL 03-3297-5601 ■FAX 03-3297-5783

■URL <http://www.vec.gr.jp> ■E-MAIL info@vec.gr.jp